

あのころこのころ

～ 思い出いろいろ ～

「グリークラブのない大学」 中城達蔵

(学部4回 初代部長・OB会初代会長)

昭和25年4月の入学式当日、私はそれが全く信じられなかった。高校時代から関学のグリーに憧れていたので、帽子の格好は気に入らなかったが、春先に合格していたこともありすっかりその気になっていたのだが、こちらは県立という事で、入学金や学費も、むこうとは天地の差があったものだから、結果的にやはり親孝行をしてみました。

無いものは仕様がなくて、とにかく創ろうと、高校時代、同じコーラス部だった上野(Top)、美濃島(Bass)などと相談して、学内を走り回ってメンバーを集めた。Top 3人、2nd 3人、Bariton 2人、bass 2人の一応経験者ばかりでバランスだけはとれた。これが我が神戸商科大学グリークラブの創始メンバーとなった。最終的にはこの年の中に、他のバスケットや軟庭から「キミは声がいい」とか「スジがいい」とか、まるで小唄の師匠みたいな事を言っていたスカウトし、一回生ばかり14名となったが、指揮の木村君などは大分苦労したんではないかと思っている。

以来五十数年、OB数は500を超え、東京と大阪にOB支部を持ち、それぞれに合唱団「コール淡水」を組織しているという大世帯となった。その事は、それぞれの年の、それぞれの後輩諸君のグリーにかけられる情熱と努力の賜である事は、疑いもない。我々10名(物故3名)

の創始メンバーとしては、この上ない喜びと共に、一生涯、誇るべき事実だと思う。

このたび大学の名が消えようとしているが、仮に別の名前となっても、我が神戸商科大学グリークラブの五十有余年の伝統は、永遠に受け継がれていくものと、確信して止まない。

グリーと私

OB会・副会長 加藤陽一郎

(学部6回「コール淡水・東京」前代表)

私は今年満70歳、世にいう古稀を迎えることになった。

これまでの70年の人生を振り返ってみるとそこには私なりに仕事や家庭の面で様々なドラマがあったし、いろいろな人間関係も生まれてきた。なかでも商大に入って仲間達と唄い始めてから50年を超えることになるグリーとの縁は深いもので、私の人生を彩る一つの柱ともなっている。特に6年程前に現役を卒業して、東京の仲間達と始めた「コール淡水・東京」の活動は、永原先生の優しくも厳しい練習によりハモッタ時の気持ち良さ、その後のピールと語り合いの楽しさ、コンサート(まだ下手だが)を終えた後のそれなりの充実感などなどの醍醐味を味わうことのできる貴重な機会となっている。

私はこれからの人生をより豊かな満たされたものにしていくためにも「コール淡水・東京」や東京の仲間達、「コール淡水・大阪」、グリーOB会との縁を大切にしていきたいと考えている。そしてこの喜びや充実感をまだ味わっていないの大きな自信とステップになったなかに呼び込んでいきたいと願っている。

夏季合宿・演奏旅行の思い出

奈良充啓

(学部7回 昭和30年度部長)

部員集めに奔走された揺籃期の中城達蔵さん、故木村豊さん達、それを引き継がれた西尾昭さん、加藤陽一郎さん達のご苦労を糧に、初期のグリークラブの骨格が出来上がってきたが、乏しい財政の中での夏季合宿 演奏旅行は、着実に部員間の絆を深め、クラブの基盤づくりに大いに役立ったことは確かである。

第1回の鳥取(S28年)、第2回の岐阜(S29年)を経て、第3回の長崎合宿で「第一期黄金時代」として一挙に花開いた感があった。当時の回顧録に記された一部を引用すると、「第3回の夏季合宿は財政きわめて不如意の当時としては全く画期的な九州遠征であった。

“関西の雄長崎に来る”の見出しでの長崎日々新聞の写真入り報道は実にタイミングが良かったし、本邦初演のロシア民謡を引っさげでの鎮西高校での特別演奏、諫早小学校講堂、長崎国際文化ホールでの演奏会など、いずれも満員の盛況で予期以上の好評を博することが出来た。特に諫早では当時としては男声合唱が珍しかったらしく校庭にまで人が溢れ、演奏が終わっても聴衆が席を立たず、体育館まで椅子運びを一緒に手伝い、夜遅く合宿地長崎へ帰る我々のバスを大勢の人が拍手で見送ってくれた等々、あの夜の感動は未だに胸に残るものである・・・」とあるが、長崎県出身の田中勇二郎氏の献身的な努力と、地元の方々の大変なご協力がなければ、とても考えられない成果ではあった。この遠征が次の世代の飛躍のための大きな自信とステップになったことは多言を要しない。

すでに半世紀近い年月がたった

わけであるが、学成り難き青春時代に心から打ち込めるものがあったこと、さらに未だに当時の友人達は勿論、老若を問わず多くの仲間と合唱を通じて感動を共有し合えることは、人生の“大きな潤い”であることは間違いない。

「あゆみ」発刊に思ったこと

OB会・副会長 坂田達哉

(学部9回 昭和32年度部長)

在学中のS30年から34年は貧しい時代だった。一回生時の長崎への夏期合宿は親に醸金して貰えず不参、四畳半一部屋の下宿には勿論テレビ・冷暖房などある筈は無く、夜は何をして過ごしていたのか、殆ど記憶にない。

しかし、決して綺麗とは言えなかったが、熱気が溢れていたあの部室での練習、そして終わった後の陽光の下でソフトボールを楽しむんだ光景は今も鮮やかに脳裏に浮かぶ。

さて、年金生活者になってまず始めたのは「物を捨てる」事であった。押入れの奥からグリー定演のプログラムがギッシリ入ったワイシャツ収納箱が見つかった。亡くなってしまえば、家人にとっては無用の長物、早速本誌の編集子に引き取って頂き少しはお役に立てたのではと思うが、むしろ同時に原節子全盛時代のブロマイド、故黒澤明監督直筆サイン入りの「どですかでん」のポスターが出てきたのが嬉しく、万一の場合は本誌と一緒に「棺」に入れてくれるよう、遺言しておこう。

自称「第二期黄金時代」

～ 商大グリーの基盤作り～を築いて

香川 睦

(学11回 昭和33・34・35年度指揮者)

昭和32年後半から35年までの4年間指揮者を拝命、自己の音楽的未熟さも棚に上げ、ただ若さと情熱で好きな男声合唱に没入突進した。昭和33年名部長カマさん(炭電氏)の時、定演会場を海員会館から新聞会館へ、翌34年我が同期生の北原部長の時、神戸一の国際会館に移した。又この間、中古ピアノとテープレコーダーを買うという快挙をなした。肝心の歌の方は、特にニグロススピリチュアルに魅せられ、デ・ボア黒人合唱団のLPから片山君(学12回)の助力を得て苦労して採譜、本邦初演で歌ったIn dat great gittin' up mornin'が心に残る。35年に神戸高校の柳歳一先生をヴォイストレーナーとして招聘、又関西合唱コンクールでグリー創部以来最高の成績(5位3名、6-8位各1名)を収めた。思えば、商大グリー入部時に男声合唱症候群に罹った自分が、未だに回復するどころか益々重症となって、30年余の社会人生活を経て、今や「コール淡水・大阪」に帰ってきた訳である。

一方、同級生12名は、常に仲良く、全員の結婚式に出席してお祝いのコーラスを贈り受け、海外旅行も家族同伴で3回、毎年全員でゴルフ会などを実施している。フリーになりつつある現在、仲間が存在がますます重みを持って実感される昨今である。

日本古来の音楽を

ハーモニーで楽しんで

升田 肇

(学部13回 昭和36年度指揮者)

昭和35年頃、すでに合唱界は雑誌「合唱界」が発刊され、学生コーラスを活動の主体として一つのピークを迎えていた。

レパートリーも宗教曲、ニグロススピリチュアル、ロシア民謡など多彩だったが、日本曲も、清水脩や

多田武彦らの組曲が盛んに演奏され親しまれていた。

そんな中で私は、日本古来の音楽(雅楽、俗曲、里唄、民謡等)にはハーモニーがなく、合唱曲として演奏されないのであるに気付き是非実現したいと、これらの和声法を学んで編曲してステージにのせた「奴さん、カッポレ、馬子唄等」。今見てみると、やや欲張りすぎていて、全楽章フルハーモニーに近く、ユニゾンや二声化してすっきりさせるべきだったと反省している。又日本語の発音と発声とハーモニーをどう調和させるかをもう一つの課題として取り組んだ思いがある。

一方、同級生12名は、常に仲良く、全員の結婚式に出席してお祝いのコーラスを贈り受け、海外旅行も家族同伴で3回、毎年全員でゴルフ会などを実施している。フリーになりつつある現在、仲間が存在がますます重みを持って実感される昨今である。

我らが仲間

大杉彬生

(学部16回 昭和39年度部長)

昭和37年入学の我らが仲間グリーメンは総勢12名ですが徳地侃二君(膳所高)が若くして世界したので現在は11名です。

学生時代と変わらぬ仲の良さを一人一人が誇りに思っております。7年前から一年に一回、2月に全員集合することとし現在まで続いております。訪れた場所を古い順に挙げますと山中温泉、浜名湖、木曾福島、伊勢志摩、葉山(三浦半島)、札幌、そして今年は犬山温泉(愛知)でした。土曜、日曜の1泊2日で飲んで、食べて、喋って、歌って、“ハモ”っております。これが実に楽しい。毎年順番に幹事

を決め、場所の選定は幹事の専権事項。でも大体関東、関西地域が交互になっております。皆学生時代と変わらずいつまでも若い！ 会った瞬間に学生時代にタイムスリップ。

楽しい時間はあっという間に過ぎてしまいますが、最後の二人になるまで続けていけたらと思っており、あと何年続くのが楽しみです。互いに自分の健康に気をつけ毎年出席したいと願っております。こんな仲間たちです。

男声合唱よ 永遠なれ

佐藤建一

(学部19回 昭和43年度指揮者)

昭和40年4月、今は懐かしい高丸学舎での入学式。その講堂に響いたハーモニー。男声だけのコーラスなんて存在すら知らなかった私にとってその響きは初めての世界だった。新鮮さに加えて無伴奏男声四重唱のハーモニーの重厚さと繊細さに身の毛がよだたのを未だ忘れられない。占部氏の優美な指揮と颯爽と登場した奥田氏の華麗なソロに魅せられてしまった。ブラスバンドを続けようと思っていた私をいきなり宗旨変えさせてしまったのだった。以来、約40年、男声合唱は私の生活の一つの柱となっており、今後一層ウェイトが高くなるであろう。“雀百まで・・・”声の続く限り唄い続けたい。淡水会合唱団、グリーンよ永遠なれ。

グリークラブの思い出

永原恵三

(S.50入部「コール淡水・東京」指揮者)

私は商大に5年在籍し、4年間はグリーンが中心で、後の1年はじめに？勉強しました。

私たちの学年は音楽経験者が多く、指揮の本多氏は小樽から来た合唱一筋の人で、彼のおかげで4回生の時に小樽演奏会が実現しました。私も中学からグリーンで、在学中から一般合唱団に所属し、その関係で商大グリーンはヴィエールフィル(現在の関西フィル)の「第九」などの演奏会に参加しました。4回生の時の第26回定演(創部30周年記念)はLPになりましたが、この時の演奏は関学をも凌ぐ！かなと自画自賛です。

私自身はその後音楽の道に進んでお茶の水女子大学に着任し、「コール淡水・東京」の幹事をするうちに、合唱をしよう、という声があがり、指揮者をさせていただいている次第です。

我々は「バブルの申し子」

だった・・・かも

林 秀 樹

(学部34回 昭和58年度指揮者)

昭和50年代後半は一期校のバンカラさが薄れてしまったが部員数も50人を超え、黄金期の一つを築いたといっても過言ではない。神戸文化ホールでの定演をはじめ、甲南女子大・神戸海星女子学院とのジョイント(コールクレール)及び滋賀大・姫路工大との近畿三大学合同演奏会を定期開催していたほか、島根大、広島女子大、小樽商大に遠征してジョイントコンサートを開くなど、活動は非常に活発であった。30回定演を皮切りに、振

り付きステージを織り込み、演奏技術のみならず視覚に訴えることができたのも、恵まれた一時代の賜物といえよう。

『グリークラブに入部して』

現役3回生・部長

矢野智樹

商大に入学した私たちを一番に迎えてくれたのは入学式でのグリークラブの学歌でした。綺麗な歌声に心を打たれ、グリークラブってどんなクラブなんだろうと興味を持ちました。そして自分もあの様に歌ってみたいと思い入部しました。私達はみんな初心者だったので、正しい音を出せているのかつらかったです。歌はパート練習をしているときは覚えるのが大変不安で、初めの頃の練習はすごくですが、他のパートと合わせるときに自信を持って歌えるようになると、歌を歌うことがとても楽しくなりました。一人で歌うよりも多くの人と一緒に歌うことは難しいことですが、綺麗なハーモニーが生まれたときはたいへん気持ちよく、この経験がグリークラブの部員として私達をそれぞれ成長させてくれました。最近ではこの3月に卒業式があり、あの入学式で歌われていたOBの方々と一緒に学歌を歌いました。間近で聴くOBの方の歌声は大変美しく、またもや感動を覚えました。

今、商大グリーン創部55周年を迎えることができ嬉しく思います。これも今までの先輩方やOBの方々の努力のおかげです。これからもグリーの花を絶やすことなく、私達の歌を聴いてくださる人に感動を与えられるような歌が歌えるよう、頑張っていきたいと思います。

最後になりましたが、これからのコール淡水の益々のご発展を現役一同心よりお祈り申し上げます。